2025

共通テスト 同傾向の問題

国語（古文）

鎌倉時代の物語の表現を、影響を与えた平安時代の物語と比較する問題

共通テスト

第4問　問3

問3　Aさんのクラスでは【文章Ⅰ】を読んだ後、それが【文章Ⅱ】の影響を受けて作られたことを学んだ。次に示すのは、二つの文章の共通点と相違点について、生徒たちがグループ内で話し合っている授業の様子である。これを読み、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

生徒A――【文章Ⅰ】も【文章Ⅱ】も、もののけとそれに苦しめられている女性が登場しています。他に、「ただ、いまひとたび、目を見合はせたまへ」という言葉の一致など、表現が共通している点も見られます。

生徒B――そうですね。それに、「小さき童」が登場している点も共通しています。病の原因であるもののけを「小さき童」に移すことで、病人を治療する方法があったようですよ。

生徒C――たしかに多くの共通点がありますね。次に、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の相違点についても考えてみましょう。

生徒D――【文章Ⅱ】では、童に移されたもののけが［　X　］と言っています。

生徒E――自分の思いを伝えようとしているのですね。では、【文章Ⅰ】のもののけはどのような行動をとっているでしょうか。

生徒A――もののけは和歌を詠んでいるのではないですか。

生徒B――あれ、この和歌は「目をわづかに見開け」た大君が詠んだものではないのですか。

生徒C――和歌の表現から考えてみませんか。「朝夕こがす胸のうち」や「いづれのかたにしばし晴るけむ」とありますよ。だから、これは［　Y　］と考えられます。

生徒D――なるほど、そのとおりですね。和歌の前後も考え合わせると、【文章Ⅰ】では、［　Z　］。

生徒E――【文章Ⅱ】に比べると、【文章Ⅰ】ではもののけをめぐる状況がずいぶん違っていますね。【文章Ⅰ】は過去の作品を取り入れながらも、独自の場面を作り出したと言えそうです。

河合塾

第2回　全統共通テスト模試　国語
第4問　問4

問4　次に示すのは、本文中に描かれた伊予守の言動やその思いについて解説した文章である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

本文は鎌倉時代に書かれた作品だが、ところどころに平安時代の物語をふまえていると思われる表現がある。それらの解説をしながら伊予守の行動と心情を追ってみる。

10行目の伊予守の発言に「あやしうも踏み迷ひ給へる緒絶えの橋かな」とある。これは、『源氏物語』で、柏木が実の妹と知らずに玉鬘に思いを寄せて「文」を送ったものの、その後に妹だとわかり、玉鬘に「緒絶えの橋にふみまどひけるよ」と恨み言を言った場面をふまえている。「緒絶えの橋」は、現在の宮城県にある緒絶川に架かる橋で、「緒が絶える」ということから「男女の縁が切れる」の意で用いられる。この発言をした時の伊予守の心情は、『源氏物語』の場面をふまえると、［　Ⅰ　］。読者は、『源氏物語』の、兄妹だと知らずに妹に恋心を抱いてしまった柏木を思い浮かべながら、『石清水物語』を読んでいくことになる。

また、伊予守は、中納言が姫君に『うつほ物語』の絵巻を贈ってきたことについて、23行目で「仲澄の侍従に思ひよそへ給ふにや」と推測しているが、『うつほ物語』には次のような場面がある。

夕暮れに、雨うち降りたるころ、中島（注1）に、水の溜りに、鴨といふ鳥の、心すごく鳴きたるを聞き給ひて、侍従（注2）、あて宮（注3）の御方におはして、かく聞こえ給ふ。

「池水に玉藻（注4）沈むは鴨鳥の思ひあまれる涙なりけり

とは御覧ずや」と聞こえ給へば、あやしう思して、いらへ聞こえ給はず。

（注）1　中島――邸宅の庭にある池の中の島。
2　侍従――仲澄。「侍従」はその官職。
3　あて宮――仲澄の妹。
4　玉藻沈む――水草が沈むほど水かさが増すこと。

仲澄は、雨が降った折、鴨鳥が心寂しく鳴くのを聞いて「池水に」の和歌を詠み、［　Ⅱ　］が、あて宮は返事もしてくれない。『石清水物語』では、伊予守が、「中納言は自身をこの仲澄になぞらえているのだろうか。この先、［　Ⅲ　］」と考えて、物思いは尽きないのである。

共通テスト：『在明の別』と、それに影響を与えた『源氏物語』を比較

全統共通テスト模試：『石清水物語』と、それに影響を与えた『源氏物語』『うつほ物語』を比較

各々、その共通点と相違点を意識させる問題を出している。